

2015 年度 後期

授業改善アンケート調査結果

大阪大学人間科学部・大学院人間科学研究科

授業改善アンケート調査結果

1. 授業改善アンケートの概要

人間科学研究科では、2004年度より、毎学期末に授業に関して受講生に尋ねるアンケートを実施している。2010年度後期より KOAN 上でのアンケートになったが、2014年度前期以降、再び授業内でマークシート用紙を配布・回収する方式に変更した。今年度の実施期間は以下の通りである。

2015年度後期アンケート回答期間：2015年1月5日～2月10日

対象科目は、人間科学部・人間科学研究科で実施されている講義科目である。対象科目数・回答数と科目群ごとの内訳は、以下の通りである。受講登録者数に対する回収率は67.8%であった。(2015年度前期：67.8%)

2015年度後期授業改善アンケート 対象科目数・回答数

		対象 科目数	回答数
共通科目		1	6
学部科目	行動系科目	15	756
	社会系科目	13	353
	教育系科目	12	484
	グローバル系科目	7	163
大学院科目		40	156
計		88	1918

回収数 1918 / 受講登録者数 2830 = 回収率 67.8%

※1 基礎科目は、行動・社会・教育・グローバル系科目に割り振られている。

2 受講登録者数は、アンケートが実施された科目についての数値である。

回収結果は数値化して集計し、自由記述分も含めて教員にフィードバックされている。さらに2010年度後期より、授業担当教員からアンケート結果を踏まえて授業の振り返りのコメントの提出を求めており、次回の授業の改善に役立てられている。

2. 授業改善アンケートの結果

2015年度後期の授業改善アンケートの回収率は、2015年前期と同様67.8%となった。今回の集計もまた、2014年前期から引き続きマークシート方式を採用した。集計方式を変更した2014年度からの回収率は、平均で68.6%（2014年度前期：70.1%、後期：68.5%、2015年度前期：67.8%）であり、ほぼ例年並みの回収率であったといえる。

主要な質問項目である、授業の満足度についての問10「この授業は全体として良い授業だったと思いますか？」（1～5の範囲で数値が高いほど高評価を意味する）については、3.89であり、学生の授業への満足度は例年通り一貫して高いといえる。

満足度に関する問10以外の質問項目の概要は、以下の通りである。

問1の「この授業へのあなたの出席率はどうでしたか？」に関しては、「80%以上出席」が71.9%と、多数の学生が授業に参加しているものの、前期よりも出席率は5%ほど低下していた（2015年前期76.1%）。また、問2の「この授業の予習・復習にあてた1週間あたりの平均時間はどれくらいですか？」に関しては、「ほとんどなし」が64.4%と回答しており、依然として多数の学生が予習・復習をしていない。授業外での自主学習を促すために課題を課す、あるいは授業内で学生に働きかけるなどの工夫がさらに必要であるだろう。しかしながら68.2%だった2014年前期に対して4%程度、改善している。また、前期の講義科目と後期の講義科目の間では後期の方が予習・復習をしない受講生が10%ほど多いという特徴もある。問4の「授業内容はよく理解できましたか？」の全体の平均値は3.55であり、ほぼ例年と同じ数値を示した。

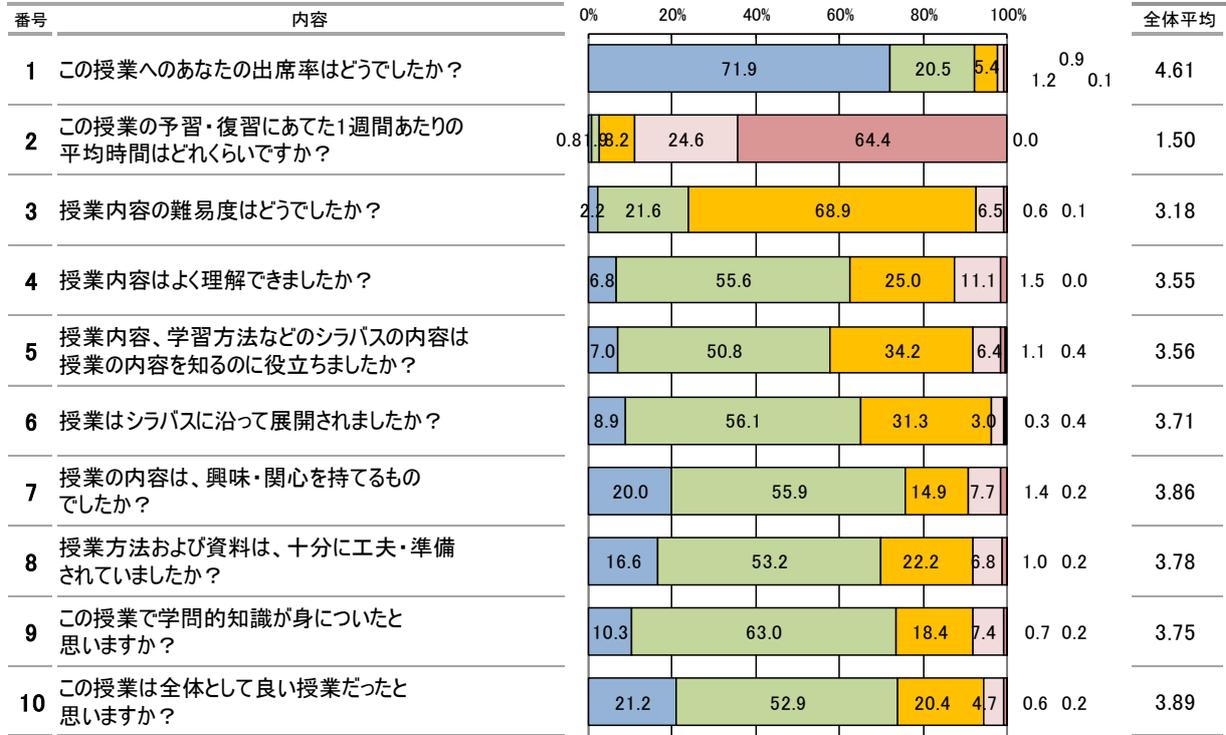
また、問3「授業の内容の難易度はどうでしたか？」に対しては約7割が「適切」であると回答しているが、前期は73.2%であるのに対して、後期は68.9%であり、後期の講義科目の多くを占める4セメスターの講義内容に改善の余地があるのかも知れない。シラバスについての問5「授業内容、学習方法などのシラバスの内容は授業の内容を知るのに役立ちましたか？」に対しては50.8%が「そう思う」と回答している。いずれも2013年以降少しずつ改善されている。問6「授業はシラバスに沿って展開されましたか？」に関しては「そう思う」の割合は56.1%（2015年前期59.9%）と、前期よりやや低下していた。問8の「授業方法および資料は、十分に工夫・準備されていましたか？」は3.78（2015年前期3.81）、問9の「この授業で学問的知識が身についたと思いますか？」は3.75（2015年前期3.77）であり、前期から一貫して高い値となっていた。

以下より、2015年度後期の授業改善アンケートの結果の詳細を示す。

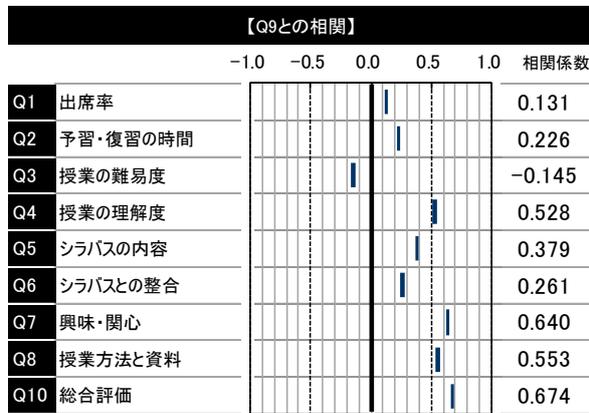
※学系別集計（p.4）については以下のように集計している。

- ・自由回答項目については除かれ、選択式の設問について集計されている。
- ・学系別集計は、学部科目については各科目が属するカテゴリーごとに集計を行った。大学院科目については、回答数が少ない学系があるため一括して集計を行った。
- ・豊中キャンパスで開講される基礎科目は、行動・社会・教育・グローバル系科目に割り振られている。
- ・学系の共通科目は、学系別集計に含めていない。
- ・各学系によって1科目あたりの受講者数などの状況が異なるため、科目群間でアンケート結果を単純に比較できない点に留意する必要がある。

全体集計	履修者数	2830
	回答数	1918
	回答率	67.8%

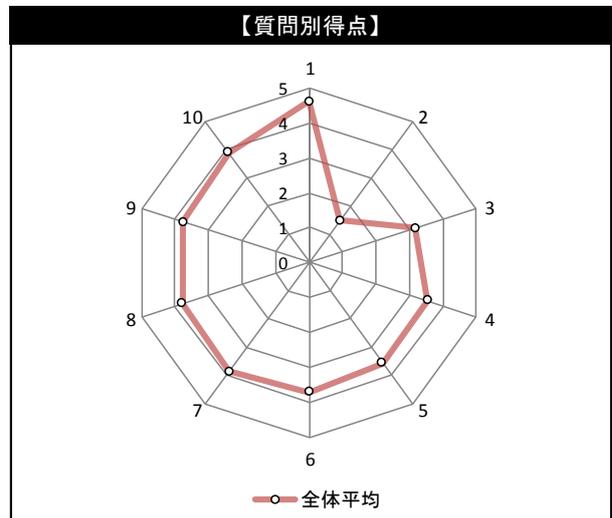
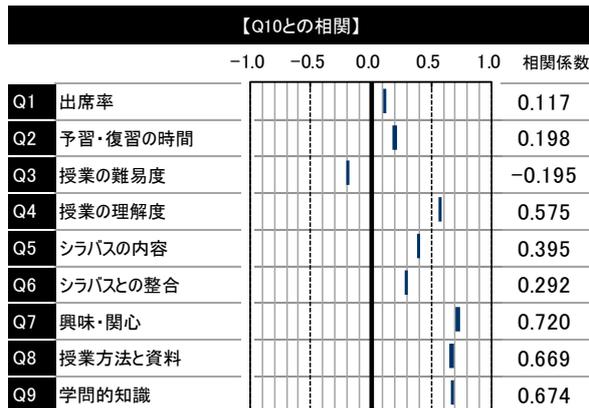


グラフ内数字は回答率(%)



回答凡例	5	4	3	2	1	-
配点	80%以上	60~80%	40~60%	20~40%	20%以下	
質問1	3時間以上	1.5時間~3時間	30分~1.5時間	30分未満	ほとんどなし	
質問2	難しくすぎる	やや難しい	適切	やや易しい	易しすぎる	
質問4~9	強く思う	そう思う	どちらとも言えない	そう思わない	全くそう思わない	不明(無回答を含む)
質問10	非常に良かった	まあ良かった	普通	あまり良くなかった	良くなかった	

相関係数は±1に近いほど関係が強く、0に近いほど弱いことを意味します。プラスは正の相関関係、マイナスは負の相関関係です。総合評価であるQ9とQ10はどの項目と関係が深いのか、授業の何を改善すればよいのかの参考値として下さい。相関係数の「-」は計算不能を示します。(例: 回答者全員が同じ回答、回答データが1件のみなど)

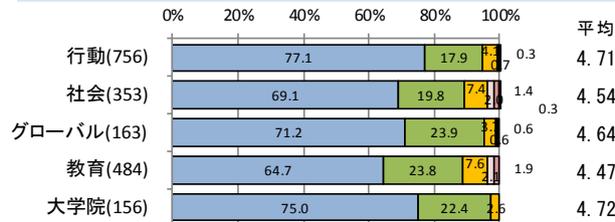


学系別集計

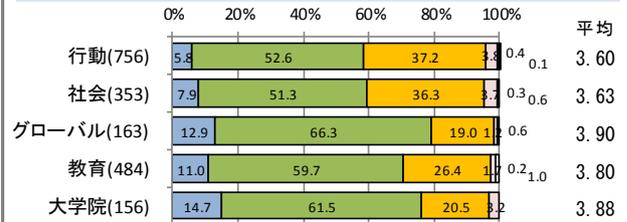
※グラフ内数字は回答率(%)

回答凡例	5	4	3	2	1	-
配点	5	4	3	2	1	-
質問1	80%以上	60~80%	40~60%	20~40%	20%以下	
質問2	3時間以上	1.5時間~3時間	30分~1.5時間	30分未満	ほとんどなし	
質問3	難しすぎる	やや難しい	適切	やや易しい	易すぎる	不明(無回答を含む)
質問4~9	強く思う	そう思う	どちらとも言えない	そう思わない	全く思わない	
質問10	非常に良かった	まあ良かった	普通	あまり良くなかった	かなり良くなかった	

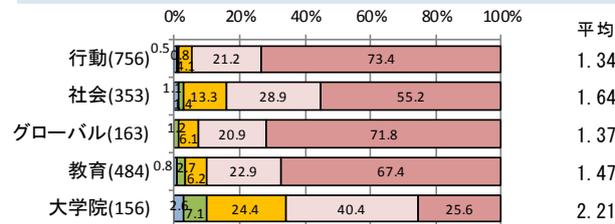
1. この授業へのあなたの出席率はどうでしたか？



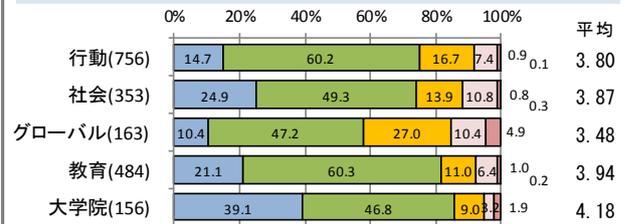
6. 授業はシラバスに沿って展開されましたか？



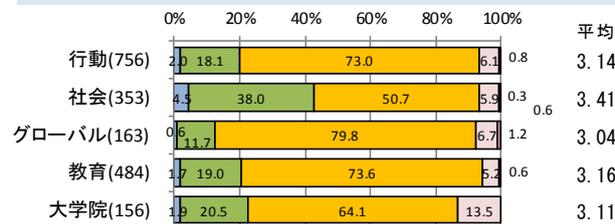
2. この授業の予習・復習にあてた1週あたりの平均時間はどれぐらいですか？



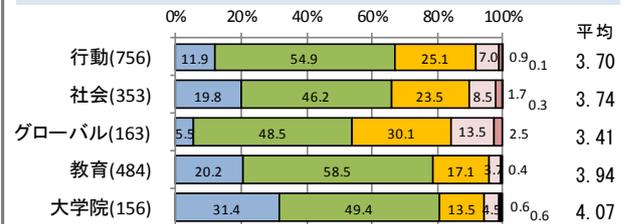
7. 授業の内容は、興味・関心を持てるものでしたか？



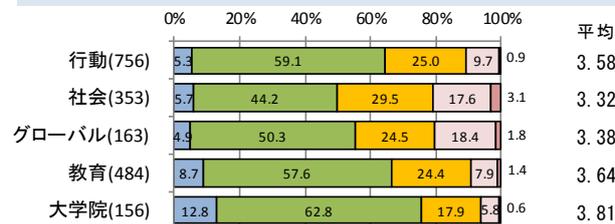
3. 授業内容の難易度はどうでしたか？



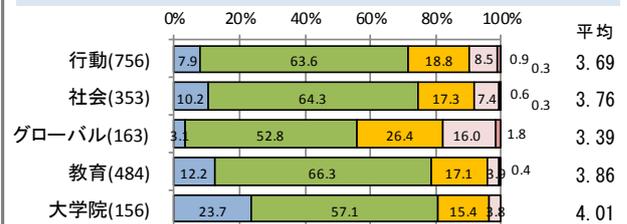
8. 授業方法および資料は、十分に工夫・準備されていましたか？



4. 授業内容はよく理解できましたか？



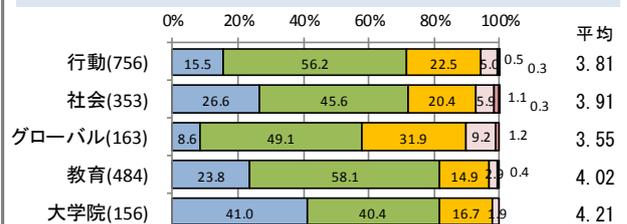
9. この授業で学問的知識が身についたと思いますか？



5. 授業内容、学習方法などのシラバスの内容は授業の内容を知るのに役立ちましたか？



10. この授業は全体として良い授業だったと思いますか？



<満足度上位の科目>

問 10 より、満足度の結果を示す（有効回答数が 10 以上の科目のみ）。平均値が高いほど受講生の満足度が高いことを意味する。アンケート対象科目 88 科目のうち、回答数が 10 以上の科目は 43 科目であり、平均値 3.94 を上回ったのは 27 科目であった。

2015 年度後期講義科目 満足度上位の科目一覧

	科目名	有効回答数	問 10 平均値
1	メディアと社会特講	10	4.50
2	コミュニケーション社会学	61	4.49
3	認知脳心理学	28	4.46
4	比較福祉論 I	13	4.46
5	応用認知心理学特講 I	11	4.45
6	基礎心理学	55	4.33
7	教育コミュニケーション学 II	45	4.31
8	経験社会学	24	4.29
9	家族社会学特講	11	4.27
10	比較教育制度学	15	4.27
11	教育人間学 I	45	4.24
12	教育工学 I	29	4.24
13	応用認知心理学	38	4.24
14	臨床死生学・老年行動学	15	4.20
15	比較行動学	70	4.20

3. 担当教員からのコメント

以下は、授業改善アンケート対象科目（ただし、基礎科目は除く）について、担当教員がアンケート結果も含めて授業を振り返ったコメントの一覧である。

佐藤 眞一	行動学概論
<p>教員コメント</p> <p>⇒学部1年生の行動学の入門科目で、研究分野の異なる6名の教員がオムニバスで実施した。アンケートの結果では、項目2の自己学習時間、項目7授業への興味関心、項目8授業方法・資料、項目9学問的知識、項目10全体評価で、全体平均よりやや低かった。学生からの意見や要望をみると、オムニバス授業のため、担当教員によって方法や資料提供が異なり、難易度にもバラツキがあるため、評価が分かれたようである。配付資料については、学生の理解度が高まり、興味を深めるためにも各教員に配付を呼びかけたいと思う。一方で、オムニバス授業なのだから総合的な授業アンケートは意味がないという意見もあり、再考が必要かもしれない。</p>	
<p>昨年度からの改善点</p> <p>⇒昨年度はシラバスが有効でないという評価が多かったが、今年度は全体平均よりも評価が高く、改善されたものと思う。</p>	
渥美 公秀	ボランティア行動学・減災人間科学特講
<p>教員コメント</p> <p>⇒熱心に講義を受けてくれたという印象がありますが、以下の点に工夫が必要だと考え、来年度改善します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○配布資料は、コースバックのようにして、入手しやすいようにする。 ○出席は工夫してより頻度を多くとる。 ○レポートの時期が遅くなったので、十分なフィードバックができなかった。双方向のやりとりを取り入れる。 	
<p>昨年度からの改善点</p> <p>⇒より深く考えてもらう課題を出した（が、レポートの時期が遅くなった）。</p>	
森川 和則	基礎心理学・基礎心理学特講 II
<p>教員コメント</p> <p>⇒ 授業改善アンケートの結果は総じて良好でした。特に授業内容の評価である質問7～10は人間科学部・研究科の全体平均を大きく上回っているので、好評であったと言えます。ただし、質問2の予習・復習にあてた時間は全体平均を少し下回りました。宿題とかの課題を増やしてもよいかもしれませんが。教室が狭いという苦情がありました。東館303番教室より広い教室はほとんどなく、本館51番教室のような大きすぎる教室では閑散として授業がやりにくいので、現状で我慢していただくほかありません。</p>	
<p>昨年度からの改善点</p> <p>⇒ なるべくトピックの途中で授業時間が終了しないようにタイミングを調整して、トピックの終わりと授業時間の終わりとが一致するように心がけました。</p>	

金澤 忠博	比較発達行動学・比較発達心理学特講 I
<p>教員コメント</p> <p>⇒月曜の朝 1 番の講義で、遅刻者も多かったが、毎回書いてもらった感想用紙には毎回多くの鋭い質問が寄せられ、自分自身刺激を受けると共に、次の授業で質問に答える中で、新たに気づかされることも多かった。遅刻が多いのを取り締まった方がよいというコメントもいただいたが、遅刻そのものをチェックするよりは講義内容や講義のやり方を工夫してより魅力のある講義にしたい。</p> <p>講義では人間の心理・行動を真に理解するためには進化的側面（生物学的基盤）を知ることが欠かせないという主張を繰り返してきたが、期末レポートを見る限り進化について本当に理解してくれたのかどうか微妙なものが多く、その点はやや残念であった。</p>	
<p>昨年度からの改善点</p> <p>⇒昨年度の内容に加えて、最新の知見をできるだけ取り入れる努力をした。更に資料が増えることになり更なる改善が必要である。</p>	

中野 良彦	生物人類学
<p>教員コメント</p> <p>⇒前担当者の急逝のため、急遽、代わりに行った講義であったため、準備が不十分なところがあったことは否めない。シラバスについても、前担当者が作成したものであり、できるだけその通りに進めようとしたが、かえってペースが一定とならなかったかもしれない。また、講義資料などの引き継ぎもなされなかったため、資料自体はPC内に保存されていたが、十分に活用できず、資料の作成ミスの訂正も困難であった。</p> <p>来年度は、講義内容をある程度、自分で吟味して行えるため、不備だった点を改善できると考えている。</p>	
<p>昨年度からの改善点</p> <p>⇒今年度、はじめて担当したため、とくに改善点はない。基本的に前担当者の形式を踏襲した。</p>	

中野 良彦	生物人類学特講 II
<p>教員コメント</p> <p>⇒受講者は社会人大学院生 1 人のみだったので、本人の希望する内容に合わせて、実習形式の授業とした。その分、予習・復習といった時間は必要とされなかったと考えられる。</p>	
<p>昨年度からの改善点</p> <p>⇒今年度、はじめて担当したため、とくに改善点はない。基本的に前担当者の形式を踏襲した。</p>	

山田 一憲	比較行動学・比較行動学特講 I
<p>教員コメント</p> <p>⇒履修者は 110 人を超えていました。出席者も毎回 7 割程度あったでしょうか。窮屈な教室であったにも関わらず、最後まで集中力を切らさず受講してくれたことを嬉しく思います（教員にとっても、あまり望ましくない環境でした）。</p>	
<p>昨年度からの改善点</p> <p>⇒特にないです。</p>	

足立 浩平	多変量統計科学・行動統計科学特講 I
<p>教員コメント</p> <p>⇒この授業のように、数学をベースにした授業はどうしても難解になりますが、わからないことがあっても気にしないことが肝心です。原理のイメージをおおざっぱにとらえていれば、大丈夫です。英語テキストを書き進めながらの授業であり、2016年度に完成の予定です。</p>	
<p>昨年度からの改善点</p> <p>⇒英語テキストを書き進めながらの授業ですので、昨年度より配布資料は充実化しました。</p>	

八十島 安伸	行動生理学・行動生理学特講 II
<p>教員コメント</p> <p>⇒今年度からは、主担当者・内容・実施方法を改変しましたが、概ね学生諸君には好評だったようです。さまざまな方面の学問へと展開していく人間科学部・人間科学研究科の受講生に「心と身体」に関する基本的知識や考え方に触れてもらうために、大学院との合併授業ながら、広く浅くという方針で講義を行っています。特に、日常生活ではあまりにも身近であったり、単純と受け止めている事柄にも、未解明であり、難しい事物がまだまだ多いことに気付いてもらえることを目指しました。そのため、内容に物足りなさを感じた受講生もいたようです。講義のスライドを CLE にアップして欲しいという要望がありますが、講義で使ったスライドを全て手に入れることが勉強でないと思います。足りないこと、分からないことがあれば、自らで調べるアクションをして欲しいと思います。講義での解説・紹介は、あくまでも、その学問・事柄への道先案内であって、それらを深めたり、広げたりするのは学生諸君の主体的な活動であるべきだと思います。</p> <p>本講義では、学生諸君に古くからの「こころと脳」の問題への関心を持ってもらい、「人間とはなにか」を考える機会・手がかりを提供していきたいと思っています。</p>	
<p>昨年度からの改善点</p> <p>⇒ 講義の前半で読書レポートを課しました。神経科学・脳科学関連の書籍を読破し、要約し、批判的に解釈し、批評することを求めましたが、概ね、良い内容のレポートが多くみられました。次年度以降も継続する予定です。毎回の授業での小テストの出題方針を変え、受講生が今まで以上に自ら考えることを促すような課題設定としました。そして、受講生の回答の数個を翌週の講義にて紹介したところ、その内容等も興味を持たれたようです。さらに、学生からのユニークな、もしくは良い回答を足がかりとして、発展的な解説を加えることができたと思います。以上の授業スタイルは当面行っていく予定です。</p>	

釘原 直樹	集団力学・社会心理学特講 II
<p>教員コメント</p> <p>⇒本講義の質問別得点の得点パターンは、全体平均のパターンとほぼ一致しており、学生には普通の講義と見なされていたことがうかがえる。予習・復習の時間が本講義を含めて全体的に少ない（講義科目の場合は無理があるとも思えるが）のでこの点に関して改善の余地があるかもしれない。</p>	
<p>昨年度からの改善点</p> <p>⇒</p>	

青野 正二	環境心理学・環境心理学特講 I
<p>教員コメント</p> <p>⇒授業内容, 方法, 学問的知識, 全体評価に関する質問(質問(7)~(10))に対する回答は, 全体的に「そう思う」, 「どちらとも言えない」, 「そう思わない」の3つにほぼ均等に分散していた。また, 授業難易度(質問(3))については, 「やや難しい」と「適切」にほぼ2等分され, 授業の理解度(質問(4))については, やや理解しづらかった傾向が見られた。以上の結果を平均値で見れば, 昨年度と異なりそれほど大きな偏りはなくなったものの, 記述式回答には, 具体的な研究例を増やすこと, あるいは資料の工夫についての指摘があり, 来年度, 理解度の改善に向けて検討していきたい。</p>	
<p>昨年度からの改善点</p> <p>⇒質問項目(3)以降について, 平均的には, 大きな偏りが減少する傾向が見られた。</p>	

白井 伸之介	安全行動学・安全行動学特講 II
<p>教員コメント</p> <p>⇒ 昨年度は全ての項目で, 全体平均および行動学系平均より値が高かったが, 今年度は全体平均と比べると, 同じかやや低かった。この点については大いに反省したい。特に難易度や満足度が低下したのは, 昨年度低学年教育で教えた内容と一部重複があったことによるのかもしれない。また部屋の収容人数が66名のところ, 69名の履修者があり, 毎回きちきちで, グループ討議等を含めた双方向型の授業が出来なかったことも低評価につながったのかもしれない。できれば少し広すぎる207室は避けたいが, 次年度も履修者数が増えれば, 207室に移り(33室は別講義で使われているため), 双方向型の授業を多くする, また授業内容を一部変更するなど, 今年度からの改善を試みたい。</p>	
<p>昨年度からの改善点</p> <p>⇒ 昨年度は全ての項目で, 全体平均および行動学系平均より値が大きかったので, 今年度は大きな変更はしなかった。次年度に向けての反省点としたい。</p>	

佐藤 眞一	臨床死生学・老年行動学・臨床死生学・老年行動学特講 II(A)
<p>教員コメント</p> <p>⇒研究分野の専門2科目のうちの1科目である。3名の教員によるオムニバス講義であったが, 授業内容については事前に調整して内容が重ならないように工夫した。アンケートの評価は, 項目4, 項目6~10が全体平均よりもかなり高く, 特に項目10の総合評価は4.20という高評価であった。超高齢社会の現代に生きている者として, 学生も新しい知識や情報を得ることができ, 思考を深めることができたものと思う。今後も, 心理学・行動学に基づく基礎的な思考法はもとより, 新たな知見をわかりやすく伝えたいと思量する。</p>	
<p>昨年度からの改善点</p> <p>⇒参考図書を示したものの, 相変わらず予習復習の時間は全体平均レベルであったが, かなりの時間をかけている学生も数人いた。授業の内容に対する評価はかなり高くなっていると思われる。</p>	

篠原 一光	行動学研究法
<p>教員コメント</p> <p>⇒授業アンケートから授業内容について適切だったと考えられる。要望としてレジュメがほしいというコメントがあり, 担当教員によっては配付資料を作成していないことがわかり, 改善すべき点である。また, 昨年度は予習復習のための時間がないことが問題点としてあげられていたが, この点はあまり改善されていない。行動学研究法は今後開講時期の変更が予定されており, 受講者の特徴が大きく変わることが予想されているため, それに対応して授業外での学習を拡充させたい。</p>	
<p>昨年度からの改善点</p> <p>⇒昨年度見られたレポートの負担が大きすぎるという指摘はなくなっており, 学生にとって量的には適切な水準になったと考えている。</p>	

篠原 一光	応用認知心理学・応用認知心理学特講 I
<p>教員コメント</p> <p>⇒今年度は講義の内容は例年通りであったが、教材として動画などを積極的に取り入れる方向で内容を調整した。また、毎回ではないが授業外の課題を提示したこともあり、評価は良好で昨年に比べても多少改善できたと考えている。講義の分量が多すぎて消化出来ないという問題を以前より抱えており、今年度も特に後半で無理が生じた。この点は改善すべき点と考える。</p>	
<p>昨年度からの改善点</p> <p>⇒授業終了時に課題を出すようにしたため、多少授業外での学習量が増えた。</p>	

友枝 敏雄	社会学説史・社会学説史特講
<p>教員コメント</p> <p>⇒少し講義のレベルを上げたので、一部の学生さんには難しいという感想になったかもしれません。ただし試験答案を見る限り、多くの学生さんはよくできていました。</p> <p>私自身の学生時代の経験から言っても、「講義内容を講義中にすべて理解できるようでしたら」そういう講義は聴講する必要はないと考えます。わからない部分があるからこそ「勉強しよう」という気になるのではないかと考えて講義していますが、この前提が間違っているようでしたら、困ってしまいますというのが、私の偽らざる感想です。</p>	
<p>昨年度からの改善点</p> <p>⇒</p>	

辻 大介	コミュニケーション社会学
<p>教員コメント</p> <p>⇒今年度も各項目おおむね高評価で、総合評価（Q10）は全体平均を 0.6 ポイント上まわりました。ただ、授業の難易度（Q3）については、ほぼ 3=適切ではあったのですが、受講生がやや難しいと感じるくらいが実は教育としては良いのではないかと考えていますので、少し内容をレベルアップしてもよいのかもしれない。私の学部講義では、教養的要素を比較的重視しているので、より専門的な知識を求める受講生には応え切れていないようにも感じています。ただ、最近の傾向として学生の（専門知識よりも）幅広い一般的教養の低下を問題に思うところがあり、この点は学生の皆さんにも課題としてもらいたいところです。</p>	
<p>昨年度からの改善点</p> <p>⇒昨年度はやや詰め込みすぎたところがあったため、扱うテーマを少し減らしました。そのため Semester 全体での進行はちょうどよかったように思います。来年度は今回とは一部扱うテーマを変更することを考えています。</p>	

吉川 徹	経験社会学・経験社会学特講
<p>教員コメント</p> <p>⇒熱心に聞いてくれました。熱心に教えました。コメントもありがとうございます。参考にします。</p>	
<p>昨年度からの改善点</p> <p>⇒わかりやすい言葉を使うように心がけました。</p>	

齊藤 弥生	比較福祉論 I・比較福祉論特講 I
<p>教員コメント ⇒講義の最終日にシート記入のお願いをしそびれてしまい、今回は 13 件の回答でした。(それにもかかわらず協力してくれた皆さんには心から感謝しています。)今年度の振り返りとしては、授業の内容に関心を持ってもらえた点はよかったこと、授業の難易度がやや高いという声があった点については反省点です。2 年生が参加する講義なので、次年度からは、やや難しいと思われる内容についてはポートフォリオシートに記入してもらい、その次の回に繰り返して説明するようにしたいと思います。</p>	
<p>昨年度からの改善点 ⇒2 回生から院生までの受講生がいるため、難易度について事前に説明する配慮をした。</p>	

遠藤 知子	比較福祉論 II・比較福祉論特講 II
<p>教員コメント⇒ 今年度は、社会政策に関するイギリスの教科書を使用し外書購読の演習を行いました。テキストを題材とした学生の発表とディスカッションを通じて、履修者が「社会政策」が扱うテーマの争点とそれらをめぐる複数の立場を理解した上で自分の立場を形成できるようになることを目指しました。今後はより多様な参考資料を活用し、履修者が議論の内容を身近な問題と関連付けるための工夫をより充実させていきたいと思っています。</p>	
<p>昨年度からの改善点⇒</p>	

牟田 和恵	家族社会学・家族社会学特講
<p>教員コメント ⇒受講生の興味や関心に答え、理解度も高いという、肯定的な評価が得られたことは良かった。中間レポートを課しコメントして返却し、それをもとにレポート作成方法について指導を行ったが、これについて好評であったので、次年度も続けたい。また、自習を促す工夫をさらに行っていききたい。</p>	
<p>昨年度からの改善点 ⇒</p>	

中山 康雄	科学哲学・科学哲学特講
<p>教員コメント ⇒昨年度に比べて、授業の中で質問がほとんど出なかった。授業の内容が高度すぎたようである。試験の答案などには示唆的なものが見られたが、アンケートの内容では、授業内容を理解するのが困難と考えていた参加者が多かったようである。今後、内容を少なくしたり、授業内容をより簡単なものにしたという対処法が必要かもしれない。</p>	
<p>昨年度からの改善点 ⇒昨年度とほぼ同じ内容の講義を行った。今年度も、同様に授業の準備を行い、資料の配布なども毎回行った。しかし、昨年度に対する改善点を特にあげることができない。</p>	

檜垣 立哉	基礎人間科学概論
<p>教員コメント</p> <p>⇒特定の先生がレジュメを用意していなかったことについて批判は多かったが、しかし全体としては6割以上のひとがまあまあ良いということであったのでその点は良かったかとおもう。少し疑問があったのは、この授業は社会人間系の授業の人間の方の授業であったのに、社会の先生のはなしをききたいというもので、これは、設計上そうになっている以上やむなく、それが伝わっていないのかとおもった。この点来年以降は一年生カリキュラムも変更されるのでそれに即して考えていければいいかとおもう。</p>	
<p>昨年度からの改善点</p> <p>⇒いまひとつパワポや資料のあり方など複数の先生でやる場合そろえた方がいいのにそれができていなかった。改善点ではなく反省点。</p>	

中川 敏	人類学理論・人類学理論特講
<p>教員コメント</p> <p>⇒「意見・要望」を次回の授業の参考にします。</p>	
<p>昨年度からの改善点</p> <p>⇒授業内容をより明確に伝えることができた。</p>	

老松 克博	臨床心理学特講 II
<p>教員コメント</p> <p>⇒臨床に関するオリエンテーションは、おそらく受講生ひとりひとり、相当に異なっています。とくにこの領域では、その多様性が甚だしいため、イメージを用いる臨床にもともと関心が薄い受講生にとっては、かなりの忍耐力を要する授業だったかもしれませんが、最後までつきあっていただき、ありがとうございました。実際の臨床は、今の多くの受講生の皆さんが誤って思い込まされているように合理的に進められるものではないし、エビデンスにもとづく知識だけですませられるものでもないでしょう。不合理な意味不明の展開に「今ここ」で、うんうん唸りながら格闘することの苦しみと奥深さを少しでも感じ取ってもらえたとすれば、これほどうれしいことはありません。</p>	
<p>昨年度からの改善点</p> <p>⇒参考になる文献などを予習用に紹介しようかとも思いましたが、やはりそれは実践に役に立たないと考え、やめました。そうではなく、ふだんの生活のあり方そのものを見直してもらうのが不可欠であることを、例年以上に詳しいイメージの拡充と解説を行なうことにより強くお伝えしたつもりです。</p>	

中澤 渉	教育環境学概論
<p>教員コメント</p> <p>⇒この科目は来年度開講されないが、類似のオムニバス形式の科目は開講されるため、講義全体としての流れ、統一性を考え、新規開講講義の参考となるようにしたい。評価は全体として概ね良好であったと考えるが、やはり昨年同様、学習に結びついていない点が課題であるといえる。特に試験を採点した結果、文章力が著しく低い学生が散見されるので、そういった点にも注意しつつ授業を展開したい。</p>	
<p>昨年度からの改善点</p> <p>⇒オムニバス形式なので、講義全体の統一性を保つため、全体見通せるようガイダンスを行った。特に試験について、どのようなことを教員が求めているか、簡単にガイダンスを行った。</p>	

三宮 真智子	教育コミュニケーション学 II・教育コミュニケーション学特講 II
<p>教員コメント</p> <p>⇒概ね良好な評価であったが、次の点に改善の余地がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●受講生が予習・復習にあてた時間が短い（「30分未満」との回答多数） <p>これについては、結果を成績の一部に組み込むミニテストをほぼ毎回実施することで、特に復習時間の増加を期待したのだが、期待通りの成果を上げることができなかったようだ。来年度は、この点をふまえて、予習・復習時間を増加させる手立てを考えたい。</p>	
<p>昨年度からの改善点</p> <p>⇒</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 授業期間の途中で、授業についての要望調査を行い、参考にした。 (2) 学部2年生や他系からの受講希望者にも配慮し、「入門的な内容」で授業設計を行うことにした。この点を最初から周知させ、受講者の知識レベルを揃えるよう努めた。 	

志水 宏吉	学校社会学特講
<p>教員コメント</p> <p>⇒ ほぼすべての項目について平均点より高い結果となり、よろこんでいる。</p>	
<p>昨年度からの改善点</p> <p>⇒ 学部生と院生とが議論する局面を増やすよう心がけた。</p>	

園山 大祐	比較教育制度学
<p>教員コメント</p> <p>⇒今年度は3回生以上が多く、レポートの質がよかったです。他方で授業への出席率、予習復習はもう少し改善できたかもしれません。授業への意見としてパワポを写すところが多いということですが、パワポは最初の3回ほどのみ使用しましたが穴埋めにしてあります。少し早かったようなので来年度は、確認しながら写すよう心がけます。</p>	
<p>昨年度からの改善点</p> <p>⇒授業の配布プリントを毎回行いました。また資料として新聞の切抜も多くしました。教育の問題を時事問題に照らして授業の関心を引くよう努めました。</p>	

佐々木 淳	臨床心理学 I
<p>教員コメント</p> <p>⇒本年度から教科書をベースに、臨床心理学全般の様々なトピックを扱う授業スタイルに変更した。学問や実践の基礎となる、基本的で必要不可欠な情報を伝えることと、受講者同士のディスカッションを行ったり、より深めた問いに結びつけることとは、限られた授業時間においてトレードオフの関係になりがちであるが、今後も受講者と相談しながらうまく両立させたいと考えている。授業中に回収したコメントシートに対する回答時間を授業時間中で持つことが難しかったため、来年度は KOAN 等を用いて私からの回答を発信したいと考えている。</p>	
<p>昨年度からの改善点</p> <p>⇒KOAN を通じたメール配信で、自宅学習用のサイト等を紹介した点。</p>	

近藤 博之	教育と社会
<p>教員コメント</p> <p>⇒人数が多いのでどうしても一方的に話す授業になってしまうのですが、もう少し受講生の理解を確認しながら進めるべきだったと反省しています。できるだけ大勢の人に興味をもってもらえるように、授業内容を工夫、改善していきたいと思います。</p>	
<p>昨年度からの改善点</p> <p>⇒授業の前半の方で映像を取り入れた。授業内容の区切りごとに質問や意見を書いてもらい、翌週の授業でその内容を紹介するとともにコメントを返した。</p>	

近藤 博之	教育動態学特講
<p>教員コメント</p> <p>⇒人数がさほど多くなかったので、受講生の意見を聞きながら進めることができた点がよかったと思います。内容がやや難しいとの評価ですが、それでも理解や興味について好意的な評価が得られており安心しました。授業におけるディスカッションの重要性を再認識しています。</p>	
<p>昨年度からの改善点</p> <p>⇒</p>	

高田 一宏	コミュニティ教育学
<p>教員コメント</p> <p>⇒内容の理解 (Q4)、シラバス (Q5)、授業方法及び資料 (Q8) の評価が高く、全体としての評価 (Q10) も全体平均より高かった。ただ、3年秋の配当だったためか、後半はやや出席率が下がる傾向があった。</p>	
<p>昨年度からの改善点</p> <p>⇒授業の資料に工夫をして、ビデオ映像・写真、歴史的な史料などを取り入れた。</p>	

高田 一宏	教育文化学
<p>教員コメント</p> <p>⇒全体的な評価 (Q10) は全体平均よりもやや高かったが、予習・復習に充てた時間 (Q2) は少なめだった。事前にテキストを読んでおく指示をきちんとすべきだった。自由記述では、教職科目で同じテキストを使った授業があり、内容がほとんど一緒だったとの指摘もあった。関係する科目との内容の調整をしておく必要がある。</p>	
<p>昨年度からの改善点</p> <p>⇒テキストの内容がやや古くなってきたので、最新の統計を資料として配ったり、最近の調査研究を紹介したりするなどの工夫をした。教育改革の動向についても、新聞記事などを使って紹介するよう、心がけた。</p>	

藤川 信夫	教育思想史・教育思想史特講
<p>教員コメント ⇒とくに、予習・復習の時間を実質化するための工夫が必要であると思う。</p>	
<p>昨年度からの改善点 ⇒質疑応答の時間を確保することにつき、引き続き努力していきたい。</p>	

藤岡 淳子	教育心理学 I
<p>教員コメント ⇒もっと予習・復習に時間を費やすよう、課題を増やそうと思う。</p>	
<p>昨年度からの改善点 ⇒試験を51教室で行うようにした。</p>	

岡部 美香	教育人間学 I・教育人間学特講 II
<p>教員コメント ⇒昨年に引き続き、かなり抽象的な理論研究の話をしました。毎回のコメントのみならず、最終レポートも力作が少なくなく、やりがいのある授業となりました。ただ、受講人数が多く、教室を二転三転したので、受講生には申し訳なかったです。</p>	
<p>昨年度からの改善点 ⇒本当に授業のテーマに関心がある学生が受講してくれるような工夫をしたので、授業がたいへんやりやすかったです。</p>	

小林 清治	人間開発学概論
<p>教員コメント ⇒出席率を除く他の項目の得点がすべて全体平均をやや下回っているため、まだ改善すべき点が多いと思います。個別の意見・要望をみると、各授業でのプレゼンの仕方、試験の事前情報の提示、他の授業との内容の重複といったところが、指摘が多く、特に改善が望まれていることがわかりました。12月22日の授業については、授業計画立案の際に、吹田と豊中の学年歴の差異を見逃していたところに根本的な問題があって、これは担当者の私に責任がありますので、受講生と当日の担当者の岡田先生にお詫び申し上げます。この授業は今年度が最後なので、せつかくの指摘を次年度の改善につなげてゆくことができないのが残念ですが、何らかの形で専攻の先生方の今後の授業に反映させていくことができればと考えています。</p>	
<p>昨年度からの改善点⇒ (1) 新規の担当者を組み込むことにより、講義内容のバラエティをもたせた (2) キーワードを提示することにより、各講義の要点がわかりやすいようにした</p>	

大谷 順子	地域研究特講
<p>教員コメント ⇒授業評価アンケートへのご協力ありがとうございました。 改組に伴い、本特講は今回で最後となり、来年度は開講されません。</p>	
<p>昨年度からの改善点 ⇒</p>	

河森 正人	動態地域論 II・地域創成学特講 II
<p>教員コメント ⇒基本的により評価をえたと考えている。ただし、予習時間があまりないという結果が出たので、次年度はこの点を改善していきたい。</p>	
<p>昨年度からの改善点 ⇒リアクションペーパーに対するコメントを次の授業でするようにした。各授業の最後で、次回の内容および当該授業とのつながりについて簡単に紹介するようにした。</p>	

澤村 信英	国際協力学 II・国際協力学特講 II
<p>教員コメント ⇒英語で授業を行っているが、授業後に回収するコメント用紙の記入内容からすると、大半の学生は十分に内容を理解しているようであった。ただ、アンケート結果によれば、授業のための学習時間が少なく、学生の自主性に任せられる状況ではないので、予習、復習をしなければ次回の授業に出られないぐらいの強制力を持たせた組み立てにする必要性を感じた。この理由の一つは、授業展開が教員中心になっていることであり、今後改善すべき点である。</p>	
<p>昨年度からの改善点 ⇒受講学生が学部生中心になったことから、自らの海外経験を発表する時間を増やした。</p>	